

CeMI 気象防災支援・研究センター

## News Letter

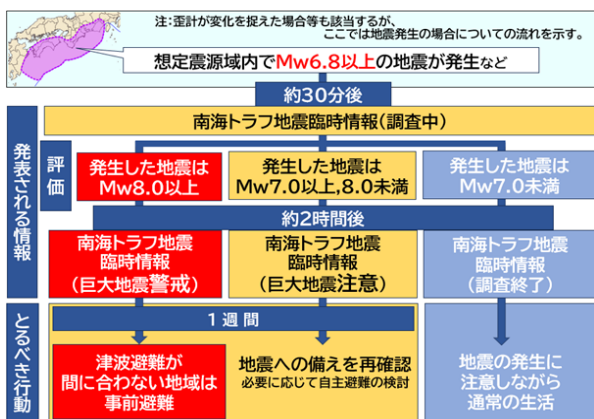
## Contents

1. 南海トラフ地震臨時情報
2. 越境台風
3. 令和元年東日本台風から5年

## 1 南海トラフ地震臨時情報

8月8日に日向灘でマグニチュード (Mw) 7.0の地震が発生したことに伴い、気象庁は南海トラフ地震の想定震源域(右図の紫色の範囲)で新たな大規模地震が発生する可能性が高まっているとして「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」を公表し大規模地震への注意を呼びかけました。「南海トラフ地震臨時情報」とは、南海トラフ沿いで大規模な地震発生の可能性が高まっていると評価された場合等に被害を減らすことを目的として気象庁から発表される情報で「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)」と「南海トラフ地震臨時情報(巨大地震警戒)」の2種類あります。両者の大きな違いは、(巨大地震注意)は想定震源域内のプレート境界でMw7.0以上、Mw8.0未満の地震が発生した場合等に発表されるのに対し、(巨大地震警戒)は想定震源域内のプレート境界でMw8.0以上の地震が発生した場合に発表されるということです。

過去の世界の大規模地震の統計データによると、今回、日向灘で発生したMw7.0の地震のように、Mw7以上の地震が発生した後に、その周辺で7日以内にMw8以上の大規模地震が発生する頻度は数百回に1回程度で、地震が発生する前の状況に比べると数倍高くなると言われています。しかし、南海トラフ地震臨時情報(巨大地震注意)が発表されても、特定の期間中に必ず地震が発生すると言ってい



るものではありません。ひとたび大地震が発生すると強い揺れや高い津波を生じると考えられるため、家具の固定、避難場所と避難場所への

**南海トラフ地震臨時情報の流れ**  
今回は黄色の部分の流れで(巨大地震注意)が発表された。避難場所への経路、家族との連絡方法など、地震への備えを改めて確認することを呼び掛けることが目的なのです。

南海トラフ地震臨時情報は2019(H31)年に運用が始められました。今回の地震で初めて発表されたこともあり、情報への社会の認知度が低く、自治体など関係機関での対応も千差万別でした。今後、国、自治体、企業、報道機関などが連携して南海トラフ地震臨時情報の意味や求められる対応の一層の周知を図り、改めて地震への備えを呼びかける必要があるでしょう。

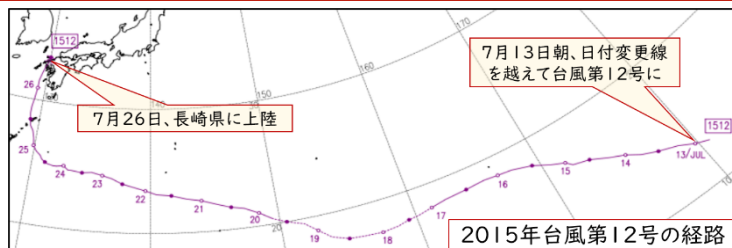


## 2 越境台風

「越境台風」という言葉はあまり耳にしたことはないでしょう。文字通り“境を越える”のですが、この境は東経180度の日付変更線です。西経域にあったハリケーンがここを越えて東経域に入ってくると新たに台風として“認定”され、「越境台風」などと呼ばれることがあります。

世界気象機関は地球をいくつかの地域に分けて、それぞれの地域における予報や観測の中枢を定めています。気象庁はアジア地域の中枢として赤道以北、北緯60度以南、東経100度から180度までのアジア太平洋域を管轄し、この領域の北西太平洋で発生する台風の解析、予報を担当しています。東経180度を越えて西進してきたハリケーンについても台風として解析、予報を担当することになります。

1951年から今年の台風第15号まで1913個の台風が発生していますが、このうち23個が越境台風です。最近では昨年の台風第8号が西経生まれの台風でした。74年間に23個ですから、平均すると3～4年に1個の割合になりますが、多い年には2002年のように3個という年もあり、東太平洋での熱帯低気圧の活動の状況と関連があると思われます。なお、西の境である東経100度を西から東に越えてサイクロンから台風になったものはこれまでにありません。イン



ドシナ半島やマレー半島があり、さらにサイクロンの多くが東進せず北上するためです。

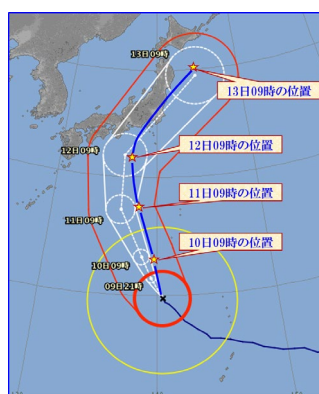
2015年の7月26日に長崎県の佐世保市付近に上陸した台風第12号は、西経域で発生して日本に上陸した唯一の台風です。7月13日の朝、180度を越えて台風第12号となるから約2週間、西進を続けて九州に上陸したものです〔図参照〕。また、西経域から東経域まで洋上を移動するため長寿命のものもあり、1994年の台風第20号〔西経域ではハリケーン、ジョン〕は8月11日にメキシコの西海岸沖で発生して西北西進して東経域に入ったあと再び西経域に戻り、9月10日にハワイのはるか北西の海上で消滅するまで29日と12時間の長寿でした。最近では、気象衛星ひまわりで太平洋全域をモニターできるため、ハワイの南から進んで来るハリケーンも容易に見つけることが可能になりました。

## 3 令和元年東日本台風から5年

令和元年10月12日に、台風第19号が上陸して東日本を中心に記録的な大雨となって甚大な災害が発生しました。半日から1日という短い時間で、広範囲に記録的な大雨が降ったことから、多くの河川で氾濫など洪水による災害が顕著でした。長野県の千曲川が決壊して新幹線基地が浸水し、多数の新幹線が水没するといった災害もありました。

また、死者行方不明者が100人に上るなど多くの人的な被害をもたらしました。気象庁は、この台風を「令和元年東日本台風」と名称を定めました。

この台風の予想はどうだったのでしょうか。右図は台風が上陸する3日前の10月9日9時の台風予報図に、実際の台風の位置をプロットしたものです。12日9時と13日9時の予想位置と実際の位置を比べるとほとんど差が無いですね。今年の台風第10号のように予報が大きくずれる台風も時にはありますが、この時は、ほぼ正確に予報ができていました。また、事前に気象庁の予報課長が記者会見を行い「狩野川台風」に匹敵する記録的な大雨となる可能性があるとして



2019年台風第19号の進路予想図  
(出典:気象庁HPを加工)

述べていました。気象庁からの情報については、現象についても、起こりうる災害の形態についても適切に呼びかけていたと考えられます。それでも多くの犠牲者が出てしまいました。5年経った今年も大雨による災害で命を落とされた方が出てしまっています。大雨による災害そのものを防ぐことはできませんが、危険な場所には近寄らない、あるいは早めの避難を徹底すれば、人的な被害が出ることはありません。そのためには、一人ひとりが自身の災害リスクをきちんと把握することが非常に重要です。

気象庁には大雨による災害発生の危険度の高まりを把握できる「キキクル」というツールがあります。年々使いやすくなっていますので、是非、活用してください。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22口ーヤル若葉105号  
http://www.npo-cemi.com/center.html

☎ 03-3359-7971

📠 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

